「人生相談」にあらわれる規範的言説

――コミュニケーションの不一致と規範の関係――

池田　知加*

本稿では，「人生相談」ないし「身の上相談」を事例に，「男性は仕事，女性は家庭」といった固定した「生き方」のモデルが説得力を持たなくなっている中での規範的言説のあり方について考察した。まず，「人生相談」を相談者と回答者のコミュニケーションとみなし，相談と回答を何を尋ねているか，何を答えているかによって区分し，それぞれ５つの段階を構成した。また，相談者と回答者のコミュニケーションが一致しているか，一致していないかという観点から，とくに不一致コミュニケーションと規範との関係をみると，不一致コミュニケーションには「答えの先取り」と，「問いの再構成」という２つの類型があり，コミュニケーションが一致している中からではなく，コミュニケーションの不一致の中からこそ，規範が問題として意識され，明示されるということが確認された。自己責任においてあらゆる選択が可能であるかのようないわば「なんでもあり」という状況があらわれているようにみえるとはいえ，「生き方」に関わる悩みとそれに対する様々な回答が提示される「人生相談」の中では，個々の行為選択と社会的規範は全く無関係なのではなく，行為選択の理由として社会的な規範は語られ，コミュニケーションの不一致において問題化されるのである。

キーワード：規範的言説，コミュニケーション／ディス-コミュニケーション，「身の上相談／人生相談」，トラブル，脱伝統化（detraditionalization）

はじめに

人が自らの人生におけるある場面で何かを選択する時に個々の行為選択を支えるものは何であろうか。一方で，どのような「生き方」を選択するかについて，自己決定という決定の「形式」が重視される傾向がある。私はいつどんな人と結婚するか，結婚したら仕事はやめるのかどうか，子供は何人持つのか，大学へ行くべきかどうか，それよりも自分の好きな道を追求した方がいいのかどうか。人生には学校，結婚，ライフスタイル，家庭，職業に関する多くの選択肢のリストがあるが，重要なことは他者の意見に左右されず，自らの意志で自律的に決定していくことである。それは「男性は仕事，女性は家庭」といった性別役割分業に基づく固定的な「生き方」のモデルや規範の拘束から解放され，その時々に応じて自らの人生を規定していくことを意味している。

他方で，あらゆる選択が可能であるとはいっても，何を選択すべきか，またどのような選択肢があるのかといった決定の「内容」に悩む場合もあるだろう。その際に，ある行為選択を支

＊立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

えたり，その資源となるような固定していた「生き方」のモデルが社会的な妥当性を持たなくなっているという現状がある。大学へ行くべきかどうか，結婚すべきかどうかといった選択について，固定的な「生き方」に拘束されることが少なくなった反面で，何の判断基準もないままに決めなければならなくなっている。すなわち，私たちはモデルとしての「生き方」から解放されていると同時にそれを失ってもいるのではないだろうか。

自分自身の「生き方」について外部から拘束されることなく，自分自身で決定していくことを「伝統からの解放」と解釈するか，「伝統の喪失」と解釈するかにかかわらず，今日においてどのような「生き方」が望ましいのか，どのような「生き方」を選択すべきかについて唯一「正しい」伝統的な答えは存在していないといえるだろう。多くのライフスタイルが分散して存在し，またそれぞれが等しく尊重されることが望ましいとされ，時にはそれらが対立するような「多元的な社会」においては，「どのように生きるべきか」といったことについて，ある一定の伝統に導かれた規範のみによって決めることができない。

そうだとしても，個々の行為選択は私的な事柄であって社会的な規範とは何の関係もないのだろうか。たしかに，何かによって外部から拘束されることなく，自らの人生を自分の力で規定していくことは解放の側面をもつだろう。しかしながら，人は自らの人生のある場面において，就職や結婚や進路といった個々人にとって重大な選択をする際に，自己責任において決めなければならないにしても，その選択に思い悩むこともあるにちがいない。そして，ある人が何らかの出来事やトラブルに遭遇し，生活の連続性がとぎれた時，これまでの生活の背後にあった「生き方」を導くような規範が意識され，浮上してくるのではないだろうか。つまり，規範が問題として意識されるのは，日常生活が順調に大きな変化もなく進んでいる時よりもむしろ，何らかの出来事に遭遇することで順調に進んでいた生活が中断したり，それまでの生活の自明性が疑わしいものになった時なのである。

本稿では，「人生相談」を事例に，人々が自らの人生において何らかのトラブルに遭遇し，悩んでいる時に，どのような「生き方」が選択されるかに関して，すなわち，相談者がどのように自らの問題を認識し，それに対して回答者がどのような「生き方」をすべきかについてどのように助言しているかに関して考察することとしたい。「生き方」を導くようなある社会的な規範に関して，どのような「生き方」をするかということに密接な関連のある結婚や教育といった諸制度から分析することができる。しかし，私は日常的な道徳規範や人々の「生き方」の指針となるような価値志向がコミュニケーションにおいて問題として意識されるのではないかという観点から，どのようにして「人生相談」の中に規範的言説があらわれているかについて考察したい。まず，「人生相談」を分析する着眼点について述べ，分析枠組みを構成する。次に，相談内容と回答内容のそれぞれにおける規範のあらわれ方について考察し，最後に〈問い〉-〈答え〉のコミュニケーション的なやりとりが一致しているか一致していないかという点から，とりわけ「不一致コミュニケーション（dis-communication）」の中での規範のあり方について考察することとしたい。

1　分析の着眼点

（1）分析の着眼点

今日，「男性は仕事，女性は家庭」といった固定した「生き方」のモデルの社会的な妥当性が説得力を失い，あらゆる選択が可能であるかのような状況があらわれているようにみえる。P.ヒーラス（Paul Heelas）は自身が編者の一人である『脱伝統化（Detraditionalization）』の「イントロダクション」において，「異なる価値を提供し，何が重要で，何がそうでないかを区別し，まとまりのある，目的をともない，アイデンティティ，人生設計，心の習慣を促進させていた道徳的ないし審美的権威を維持していた組織化された文化」[1]の「信憑性の構造」がその確実性を喪失してることを「脱伝統化（detraditionalization）」と規定した。このような「脱伝統化」のテーゼについては詳細な検証が必要とされるが，今日では「女性の幸福は家庭にある」，「一生懸命働く男性こそりっぱ」といった性別役割分業に基づく固定的な「生き方」が説得力をもたなくなっていることはいくつかの意識調査からも確認することができるだろう[2]。つまり，どのような「生き方」をするのかについて，唯一「正しい」答えは存在せず，固定した「生き方」が説得力をもたなくなっているのである。そうすると，何のよりどころもないままに各々のライフサイクルにおいて何らかの選択を自分自身で決めていかねばならなくなっているという議論が成り立つ。たとえば，N.ボルツ（Norbert Bolz）は『意味に飢える社会』において，「われわれの現実において，自明なものはもう何もない。［…］現在を生きるということは，価値のコルセットをつけて生きること，大きな理念や制度にはまって生きることではないのだ。人は，自分が何であるかを自分で決めなければならない。意味はますます私的なことがらになっていく。『自己実現』という呪文は，個人が引き受けるこうした負担を，表現するよりも覆い隠すものでしかないのである」[3]と述べている。このような議論がもっともらしくみえるという現実もあるが，近代化過程にともなう規範的価値の変化についてはおよそ三つの解釈が可能であると思われる。

第一は，M.ヴェーバー（Max Weber）のいわゆる「意味喪失テーゼ」に代表されるように，普遍的で一貫性のある統一的な価値からの解放あるいはその喪失を「世俗化」として近代化過程の不可避の傾向であるとする解釈である。すなわち，「こんにち，究極かつもっとも崇高なさまざまの価値は，ことごとく公けの舞台から引きしりぞき，あるいは神秘的生活の隠された世界のなかに，あるいは人々の直接の交わりにおける人間愛のなかに，その姿を没し去っている。これはわれわれの時代，すなわち合理化と主知化，なかんずくかの魔法からの世界解放を特徴とする時代の宿命である」[4]。

このような近代化過程の解釈は価値の相対主義化のもとでニヒリズムと結びつくという可能性がある。つまり，人がある行為を選択する際の基盤となる価値判断は，すべて個人の内面における社会とは孤立した事柄となり，社会との接点が失われてしまうことになる。したがって，「このような意味の喪失をヴェーバーは，社会の秩序の中ではもはや達成され得ない統一性を，それぞれの個人の人生という私的領域のなかで，絶望の勇気によって，つまり希望なきものの不条理なる希望によって創出せよという，個々人に対する実存的要求として解釈する」[5]ことにならざるを得ないのではないだろうか。

第二は，「意味喪失テーゼ」を前提にしながらも，それに対するものとして宗教や伝統といった統一的な価値や規範の根深さを確認したり，あるいはそうしたものの再生を志向するといった解釈である。たとえば，R.N.ベラー（Robert N. Bellah）は「伝統とは，共同体が長い時間をかけて作り上げた理解と評価のパターンである。伝統はすべての人間行為の本来的次元である」[6]として，人々の意識の中に伝統的な規範的価値や宗教的な意識が深く根付いていることを確証しようとしている。

第三は，「意味喪失テーゼ」を近代化にともなう一面的な合理化という観点のもとで捉えるのではなく，すなわち，「社会の合理化の諸過程を目的合理性という観点でしか視野に収めない」[7]のではなく，「合理化」をJ.ハーバーマス（Jürgen Habermas）のように人々のコミュニケーションの潜在力の高まりとしてより積極的な側面からもとらえる解釈である。

私がここでとりたいのは第三の解釈であるが，それは自己の人生を自分自身で決定していくことが「英雄的」な行為であるばかりではなく，また個々の選択の価値判断が宗教や伝統といった超越的なものによってのみ導かれるのではない方向をとりたいからである。

そこで本稿では，人々が個々の行為を選択する際にそのよりどころとなるものが，固定した性別役割分業に基づく「生き方」のモデルがその説得力を失ったことによってかえって逆に人々のコミュニケーション過程において問題として意識されていくのではないかという観点から，価値や規範のあらわれ方について分析したいと考えている。

（2）コミュニケーションとしての「人生相談」

本稿では，個々の行為選択と規範との関係を分析するためのデータとして，主に新聞紙上に掲載された「人生相談」ないし「身の上相談」を扱う。それはまず第一に，ある行為選択と価値や規範の関係は，相談者がその行為選択について悩んでいるときに問題として浮上すると考えられるからである。つまり，価値や規範は何らかの出来事やトラブルに遭遇した非日常的な場面においてよりいっそう意識されると思われるからである。第二に，「人生相談」を相談者と回答者のやりとりと見なすことによって，コミュニケーションにあらわれる価値や規範について分析するための恰好のデータとなると考えられるからである。

日本における価値意識の社会学的研究は，主として社会意識研究という枠組みにおいてなされてきたが，そこでは価値意識を客観的な諸条件によって説明する試みがなされていたといえるだろう。たとえば，かつて見田宗介氏は「現代における不幸の諸類型」において，「身上相談」を不幸を直接的に示すデータと見なし，現代におけるさまざまな不幸の類型を構成し，その「社会的基盤」について分析したことがある[8]。

しかしながら，私は「人生相談」が「不幸」を示すデータであるだけではなく，相談者が抱える「不幸」に対して，回答者がそれに対する対処法や解決策といったより望ましいものを提示していることに注目したい。「人生相談」は，ある相談者の「悩み事」に対して，回答者が何らかの解決策を提示したり，助言したりするという相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりから成り立っている。つまり，「人生相談」は相談者がもっぱら自らの「悩み事」を

うち明けるという一方的なものではなく，相談者の「悩み事」に対して回答者が回答するというコミュニケーション的なやりとりである。そうした相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりに価値・規範意識があらわれるという観点から，今日における個々の行為選択と価値規範のあらわれ方の特徴について分析する。そこで，問題にするのは「支配機構」によって「制度化した価値」ではなく，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりにあらわれる価値や規範の形成過程そのものである。

このようなものと類似の視点を鶴見和子氏はかつて「身上相談の論理」において提示したことがある[9)]。鶴見氏は「人生相談」ないし「身の上相談」の特徴について以下のように述べている。

『身上相談』は，日常生活において，個人がつきあたる具体的な問題から出発し，その問題が起こってくる個別的な状況に密着して，解決の方法をみいだそうとする，日常的な思考の一つの方法である。問題が，個別的具体的であること，回答が，問題解決へのなんらかの具体的な行動の指針を可能性としてさし示すものであること，さらに，問題提起と問題解決への方向の示唆が，質問者と回答者のあいだの，コミュニケイションによって成立していること，などの点で，哲学思想のながれの中では，デューイの考えたような，プラグマティズムの理論（探求の理論）に形態上の類似性をもっている。

このように，鶴見氏は人が自らの人生の中で何らかの問題を抱え，試行錯誤し，解決方法を探りながら生活していく中での「日常的な思考の一つの方法」として「人生相談」を見なし，

表1　鶴見和子氏による分析枠組み

・質問（Q）の分類
- q1　悲鳴をあげる。
- q2　問題の焦点がつかめない。したがって解決へのみとおしが，全くたたない。
  - i　自分で自分がわからない。
  - ii　願望に対する障害があまりに大きく，つき破って進むことができない。
  - iii　将来にたいする漠然とした不安。
- q3　問題が，解決へのいくつかの可能性につながるものとして構成されており，岐路に立っているという意識がはっきりしているが，自分ではどれを選択していいか，判断がつかない。
- q4　どの道をとるか，自分の判断はきまっているが，それが，正しいかどうか自信がない
- q5　判断がきまり，それが正しいことに自信をもっているが，それを実行するための技術的な手つづきがわからない。

・回答（A）の分類
- a1　きく。質問者の訴えにイミがあることを認める。
- a2　問題の所在をあきらかにする。
  - i　あなたはこうですよ，又はこうではありませんかと，いってやる。
  - ii　イ　周囲との妥協をすすめる。
    - ロ　願望をつらぬくことを勇気づける。
    - ハ　両立しないと思っていたことがらを，両方させる方法を教える。
  - iii　将来おこるべきことがらの蓋然性を示す。
- a3　イ「もしこうすれば，こうなるであろう」のかたちで答える。
  - ロ　回答者の価値判断にしたがって，質問者［…］の行動決定にかんする判断を下す。
- a4　イ　質問者の判断が正しいことを承認する。
  - ロ　質問者の判断が正しいことを否認する。
- a5　技術的な手つづきを教える。

（鶴見和子「身上相談の論理」，思想の科学研究会編『芽』1953年，９・10号，31-32頁より）

相談者が「なにをきいているか」，またそれに対して回答者が「なにを答えているか」にしたがって相談と回答内容を区分した（表1）。また，その区分にしたがって鶴見氏は相談者と回答者の間に「くいちがい」があるかどうかという観点から，「質問者と回答者のあいだに，コミュニケイションが成立している（communication）か，あるいはくいちがっているか（dis-communication）」について考察した。

「人生相談」ないし，「身上相談」の分析にはいくつかの先行研究[10]があるが，そのほとんどは相談者の相談内容に焦点が合わされており，相談と回答を合わせて分析しているものは少ないといえる。本稿では，相談者と回答者のやりとりをコミュニケーションとして「人生相談」を分析した鶴見氏の分析枠組みを参照にしながら，それに多少の修正を加えて本稿の分析枠組みを構成し，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりにあらわれる規範的言説について考察する。

（3）データの概要・分析枠組み

本稿では主として読売新聞紙上に掲載されている「人生案内」から1999年度分の309件，週間朝日別冊『現代ニッポンにおける人生相談』（1997年）から「現代ニッポンの悩み」として掲載された相談77件（複数回答115件），及びどちらの相談者も女性が大部分を占めるために補足的に朝日新聞紙上に掲載された「人生相談：男もつらいね」（相談17件，複数回答34件）を用いる[11]。

表２-１　相談件数の性別による比率　（%）

	読売新聞「人生案内」	週刊朝日別冊
男　性	13.3	35.1
女　性	86.7	64.9

表２-２　相談件数の年齢別による比率　（%）

	読売新聞「人生案内」	週刊朝日別冊
～10歳	－	1.3
10代	5.8	6.5
20代	27.5	19.5
30代	31.7	24.7
40代	10.0	10.4
50代	10.7	11.7
60代	8.7	6.5
70代～	3.2	－
不明	2.3	19.5

相談者の性別，年齢層の比率をみると，女性からの相談が多数を占め，年代では20代と30代が多くなっている（表２）。したがって，これらのデータから統計学的な調査で用いられるような「代表性」を得ることはできない。その点について，見田宗介氏は，「身上相談」から「比率や分布などの数量的な結論を出そうとするのではない」とし，「身上相談」が「極端な，あるいはむしろ例外的な事例が，他の多くの平常的な事例を理解するための，いっそう有効な戦略データ」となると述べている[12]。しかし「戦略データ」という利点はあるものの，新聞や雑誌に掲載される「人生相談」ないし「身の上相談」には相談を抽出する際の編集の問題[13]や相談者による脚色や創作の可能性も存在する。

しかしながら，本稿では，相談者による創作や脚色の可能性があるにしても，相談者と回答者のやりとりを分析するにあたって，それが弊害になるとは考えていない。なぜなら，相談者の「悩み事」がどのような問題であれ，それに対して何らかの回答がされている限り，「人生相談」の構造そのものに変化はないからである。本稿で分析の焦点を当てるのは，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりにあらわ

れる「生き方」や社会的な規範であって，相談者の「悩み事」そのものではない。したがって，たとえ事実ではない相談であったとしても，そこには何らかの生活上の問題が提示されており，またそうした問題に対する解決方法や助言が提示されている限り，分析の着眼点からみて「人生相談」はデータとしての有効性を満たしていると考えられる。

そこで本稿では，鶴見氏と同様に相談者が何を尋ねているか，それに対して回答者が何を答えているかにしたがって，問題解決へ向かうプロセスとして相談内容と回答内容を以下のように区分した。

相談内容の区分

- **Q0　「悩み事」の解釈について（承認）**
- **Q1　現実解釈について（見通し）**
- **Q2　解決方法について（方法）**
- **Q3　ある行為を選択することについて（行為選択）**
- **Q4　解決のための技術的な問題について（手段）**

回答内容の区分

- **A0　「悩み事」の解釈（解釈）**
- **A1　問題の整理，原因の解明，方向性の提示（問題構成）**
- **A2　考えられうる解決方法の提示（解決方法）**
- **A3　事実判断あるいは価値判断に基づく行為の選択（予測的判断）**
- **A4　技術的な手段の提示（技術）**

相談と回答の中にはいくつかの問いや答えが重複しているものもあるが，もっともすすんでいる段階をとってカウントすると，解決方法について尋ねているものが最も多く，それに対応して解決方法を提示している回答が最も多くなっている（表３）。相談と回答の区分の各段階については次節で価値・規範との関係とともに詳細に論ずることとする。

表３-１　相談件数の区分の比率　（%）

	読売新聞「人生案内」	週刊朝日別冊	朝日新聞「男の人生相談」
Ｑ０（承　　認）	13.3	13.0	23.5
Ｑ１（見　通　し）	21.4	21.7	17.6
Ｑ２（方　　法）	48.9	47.8	35.3
Ｑ３（行 為 選 択）	6.8	7.0	23.5
Ｑ４（手　　段）	9.7	10.5	―

表３-２　回答内容の区分の比率　（%）

	読売新聞「人生案内」	週刊朝日別冊	朝日新聞「男の人生相談」
Ａ０（解　　釈）	11.7	18.3	2.9
Ａ１（問 題 構 成）	34.6	29.6	32.4
Ａ２（解 決 方 法）	40.5	40.0	58.8
Ａ３（予測的判断）	3.9	3.5	5.9
Ａ４（技　　術）	9.4	8.7	―

「人生相談」ないし「身の上相談」の回答者は弁護士，カウンセラー，評論家，作家など様々な回答者が存在しており，類似の相談に対して回答者の職業やパーソナリティによって回答内容が自ずと異なってくることになる。また，同じ回答者が答えている場合でも，類似の相談に対して異なる回答が提示されることもある。つまり，類似の問いに対してつねに特定の答えがなされるとは限らないのである。しかしながら，ある相談に対して複数の回答が掲載される「人生相談」があることからもわかるように，「人生相談」の役割の一つは，ある相談に対して可能な限り多くの解決策を提示し，ある問題やトラブルに対処するにあたって「予測的判断」を提示し，相談者のみならず同様の問題を抱える読者にとっても参考にすることができるような解決方法のいくつかのモデルを示すことにある。したがって，相談と回答を区分する際に，このような「人生相談」の回答の特徴を前提にすすめなければならない。

2 「人生相談」における規範的言説のあらわれ方

（1）相談内容の区分

ここでは解決へ向けての「悩み事」のプロセスについて段階ごとに詳細にみながら，「悩み事」が問題として認識されるには，何らかの反事実としての規範的な観点が必要になるということを確認したい。つまり，現実と対比される理想的・反事実的な状況から現実を捉えることによってはじめて相談者の現状が問題として認識され，「悩み事」が成立するのである。

- **「悩み事」以前（Q0）：「悩み事」についての悩み**

「『死』が怖くて仕方ない」

30歳代の主婦です。「死」が怖くてしかたありません。［…］急病で亡くなった知人のことを思うと，眠れなくなります。子供たちを残して死ねないという思いももちろん強いのですが，それだけではなく，「死」自体が怖いのです。［…］みんなはどうして死ぬことを意識しないでいられるのか，いつかは死ぬことが分かっていて，不安だったり，怖くなったりしないのか。こんなことを考える私は，何かおかしいのでしょうか。（「人生案内」11/26/1999）

この段階で相談者は自分の「悩み事」が問題にするにたる事柄なのかどうかに悩んでいる。つまり，まだ「悩み事」が問題として認識されていない段階である。ここで相談者が悩んでいるのは，自分が感じている不安が問題になり得るのか，その確証のなさである。もっとも典型的な問いかけとしては，「～と感じる私はどこかおかしいのでしょうか」といった表現になる。上記で示した相談のように，「死が怖い」と感じることそのものについてではなく，「死が怖い」と感じる自分自身についてそれがおかしいのかどうか（「こんなことを考える私は，何かおかしいのでしょうか」）についての悩みである。こうした相談者の「悩み事」は回答者に「悩み事」であると承認されなければ「悩み事」にならないような「悩み事」である。また，この段階の相談には，自らの意見の表明も含まれている。この場合相談者が回答者に求めていることは自らの考えについての解釈である。したがって，これに対応する回答として，回答者は相談者の不安や意見を解釈しなければならない。

・第一段階（Q1）：現実解釈についての悩み

「勉強一筋，生き方に疑問」

20歳代半ばの無職の男性です。これまでの自分の生き方に疑問を持つようになり，どう立て直せばいいか思い悩んでいます。高校受験の時は，テストの成績だけで志望校を決めました。ところが，その高校は修学旅行もない進学校で，私は必死で勉強についていきました。高校は自分を成長させる場のはずと，何度も悔やんだのですが，意地を張って学校にしがみつきました。大学受験の時は，現役で受かった大学をけって，自宅学習で受験をやり直したのですが，失敗し，結局，２浪してしまいました。大学に入ってからも，ただ講義の単位を取るためだけに通い，サークルには入らず，友人も彼女も作らず，いろいろな店にも行かずに学生生活を終えました。これまでの心の支えは勉強だったのです。それが今，何を支えにすればいいのか分からなくなっています。どうかアドバイスをお願いします。（「人生案内」６/15/1999）

この段階で相談者は「悩み事」を問題として認識するようになるが，解決へ向けてどのように進めばいいか，その見通しがわからずに悩んでいる。つまり，自分が何らかのトラブルに遭遇しているとわかってはいるが，どういう方向に向けてそれを解決すればいいのかがわからないのである。もっとも典型的な問いかけとしては，ただ「どうすればいいのでしょうか」といった表現になり，どこから手をつけていいのかすらわからない状態である。その場合相談者が回答者に尋ねていることは，問題が生じた原因や問題状況の整理・解明である。「何がなんだかわかりません」といったように，解決へ向かう方向性を見失っている段階である。これに対応する回答は，問題状況を整理し，解決への見通しを提示することである。

・第二段階（Q2）：解決方法についての悩み

「何でも話せる親友がいない」

30歳代の女性です。親友がいなくて悩んでいます。仕事をしているので表面的な付き合いはいろいろとあるのですが，心の底からずっと一緒に居たいと思える親友がいません。20歳代の初め，一番仲の良かった親友が亡くなって以来，何でも打ち明けられる友達がいなくなったのです。［…］亡くなった友達以上の人はいまだに現れず，年だけとってしまったような気がします。表面的な付き合いだけの人生を送るのかと思うと悲しくなります。［…］私のことをわかってくれて，何でも相談にのってくれる同世代の女友達を作るにはどうすればいいのでしょう。（「人生案内」７/７/1999）

相談者は自らの問題を認識し，問題解決という方向性も獲得しているが，そのための方法がわからずに悩んでいる。つまり，相談者は問題解決という目標を獲得しているが，それに到達するための方法について尋ねているのである。もっとも典型的な問いかけは「～するためにはどうすればいいのでしょうか」という表現になる。この段階が「人生相談」にもっとも多くみられる段階である。これに対応する回答として，回答者は可能な限り多くの解決方法を提示しなければならない。なぜなら，新聞や雑誌に掲載される以上，解決方法には相談者の個人的な次元に加えて，相談者以外に同様の問題を抱える人にも当てはまるような一般的な次元が想定されなければならないからである。したがって，回答は個別的な問題に対する解決方法とともに

一般的な解決方法という個別的及び社会的次元の両方が含まれていなければならない。

・第三段階（Q3）：ある行為を選択することについての悩み

「『弱い者いじめ』する会社」

30歳代の男性です。勤めている会社では体力のある人が幅を利かし，気の弱い人やノルマの上がらない人，うまく立ち回れない人に対して，にらみつけたり，当たり散らしたりしています。会社側は，こわもての人を使って生産量を上げ，社員を管理したいのだと思いますが，弱い者いじめとしか思えない光景を見ると耐えられません。私は何度か転職して，今の会社におりますが，これまで勤めたどの会社でも，我の強い人でないとうまくやっていけない風潮がありました。［…］だれも好き好んで要領が悪かったり，気が弱かったりするわけではないのに，強圧的に「みんな同じ」を求められるのはおかしいと思います。このまま会社に残ろうかどうか迷っています。（「人生案内」４/15/1999）

相談者は問題解決のためのいくつかの方法を認識しているが，そのうちのどれを選択すべきかに悩んでいる。ここで相談者が尋ねていることは，いくつかの行為の中でどれを選択すべきかという判断とその根拠である。典型的には「どちらの行為を選択すべきでしょうか」といった表現になる。つまり，相談者はある行為を確信をもって選択するための助言や指針や判断基準を求めているのである。これに対して，回答者はある行為を選択する理由を述べなければならない。あるいは，それぞれの行為を選択した場合に予測される事態を説明しなければならない。

・第四段階（Q4）：解決のための技術的な問題についての悩み

「多額の借金繰り返す父，肩代わりも限界」

30歳の主婦。数年前に結婚した直後，60歳代の実家の父が，消費者金融に１千万円以上の借金をしているのがわかりました。きっかけはかけ事で，母と兄，私がそれぞれ貯蓄をはたいて何とか返済しました。ところが，最近，新たに500万円もの借金ができたというのです。［…］今度は母や兄と私が銀行などのローンを借り，ようやく返しました。もし，また同じことが繰り返されたら，もう手の打ちようがありません。私たちは頭に来て，母も離婚する気になったようです。私たちもこれ以上，父に迷惑をかけられたくありません。親子の縁を切るためには，何か法的な手続きが必要でしょうか。（「人生案内」３/３/1999）

相談者は問題解決へ向けての解決方法を認識し，いくつかの中から一つの解決方法をとっているが，そのための技術的な問題に悩んでいる。ここで相談者に欠けているのは，その解決方法を遂行するために必要な技術的な手段や知識である。したがって，問いかけはより具体的なものになる。この技術的な問題をクリアーすれば，相談者の「悩み事」は解決されることになる。これに対応する回答として，回答者は相談者に欠けている技術的な知識や手段を提供しなければならない。

これらの段階と規範との関係をみると，まず「悩み事」以前の段階（Q0）においては，相談者が自分の意見を表明するような相談において直接的に自らの価値ないし規範意識が語られるものを除けば，ほとんどの相談者の不安は「漠

然とした」ものであるため，規範的な観点が確立されていないといえる。つまり，反事実的・理想的な状況から自らの現実を捉えていないため，それを問題として認識することができないのである。

次に，第一段階（Q1）において，相談者は何らかの規範的な観点から構成された問題が解決されているという目標となる状況の見通しがないために悩んでいる。したがって，この段階においても相談者は規範的な観点を見失っているといえる。この段階以降では，明示的にか暗示的にかにかかわらず，規範的な問題解決という目標が想定されている。つまり，「悩み事」を問題として認識するためには，規範的な観点が不可欠となるといえる。

また，価値や規範がもっとも意識されるのは第三段階（Q3）である。なぜなら，いくつかの解決方法の中から一つの方法を選択する根拠として価値ないし規範が必要とされるからである。第二段階（Q2）と第四段階（Q4）においては，問題解決という理想的な状況が想定されているため，規範的な観点は前提にされているといえる。

ここでいう問題解決という理想的な状況の内実がすべて規範的に構成されているということではない。実際にそれは個人的，金銭的，伝統的など様々な動機によって構成されており，必ずしも社会的に妥当な規範的内容をもっているわけではない。しかしながら，ここで問題解決という理想的な状況が規範的に構成されているということは，ある「悩み事」を現状の問題として認識するための準拠点となる理念的な構成物という意味においてである。すなわち，問題解決という理想的な状況の内実が何によって構成されているかにかかわらず，あくまでも現状の問題と対比されるものとしての反事実的という意味で規範的なのである。ある出来事が問題として構成されるためには，それとは正反対の状況との対比によってであり，そこで問題が認識されてはじめて「悩み事」となる。したがって，人がある出来事やトラブルに遭遇した際に，それを問題として認識するためには理想的な状況があらかじめ現実と対比される反事実的な規範として相談者に意識されていなければならないのである。

（2）回答の特徴：どのように答えているか

「悩み事」には少なからず規範的な観点が不可欠であるが，回答において，価値規範はどのようにして語られるのだろうか。かつて，見田氏は「現代における不幸の諸類型」において，1962年の「読売新聞」に掲載された「人生案内」からいくつかの「不幸の諸形態」について分析した際に，「出世街道」を歩むことや「女の幸福は家庭にある」といったような固定した成功や幸福のイメージが広く受け入れられることによってかえって「不安や焦燥」が生じるという逆説について論じていた[14)]。そこでは「出世街道」を歩むことや「女の幸福は家庭にある」というような成功や幸福の固定化された「生き方」が相談者にも回答者にも「何の疑いもなく前提」にされている。そうすると，そうした固定した理想的な「生き方」から逸脱することが「悩み事」となる。「学問か家庭か迷う乙女」（「人生案内」1950/11/24），「就職するためには，大学を出なければダメでしょうか」（「人生案内」1954/３/12）といった「悩み事」は「女性の幸福は家庭にある」，「大学へ行くことが成功の第一歩」という固定した「生き方」が前提にされているからこその悩みである。そうした「悩み

事」に対して回答することは，今日からすればいくらか単純に思える。なぜなら，そうした前提に賛成するか，反対するかのどちらかでしかないからである。

しかしながら，およそ1970年代以降の「人生相談」において「出世街道」を歩むことや「女の幸福は家庭にある」というような固定した「生き方」はもはや妥当性を失っているといえる[15)]。つまり，1970年代以降の「人生相談」においては相談者にとっても回答者にとっても固定した「生き方」のモデルや規範が「何の疑いもなく前提」にされているとはいえない。それと同時に，「結婚か/仕事一途か」「大学へ行くべきか/大学へ行かなくてもよいか」といった対立軸のまわりで成り立っていた「悩み事」が成立しなくなる。なぜなら，結婚しても，仕事に専念しても，大学へ行っても，行かなくてもどちらでもかまわない，「何でもあり」だからである。そうすると，悩み方も変化してくる。「30歳になって結婚していないことに悩むのはおかしいでしょうか」といったように，相談者の悩み方は固定的な「生き方」のモデルからの逸脱についてではなく，それを逸脱と思う自分の考え方に関するものになる。つまり，固定した「生き方」のモデルが解体し，原理上はあらゆることが可能であるとなると，それを認識している相談者の悩みは自己言及的になっていくのである。

このように相談の質が変化し，固定的な「生き方」のモデルの妥当性が疑わしくなると，回答者はしばしば「あなたにとって大切なものは何かを自分で考えてみましょう」といったように，自己決定という決定の「形式」を重視する場合もある。今日，相談者が固定化された規範に逸脱したことで悩めなくなっているのと同様に，回答者も何らかの規範に依拠しながら，相談者に行為を指示することが困難になっているのである。しかしながら，相談者に「それを決めるのはあなた自身です」と答えることは，実質的には何の答えも提示していないに等しい。相談者はまさに自分で決めることに困難を感じているからこそ相談するのである。

しかし，相談者の悩みに対して，回答者が助言をしたり，解決策を提示したりするという「人生相談」の構造からすれば，相談者が何らかの行為の指示を求めているような相談に回答者は答えなければならない。とりわけ，Q３のような相談に対して回答者はある行為を選択することを指示するように求められる。しかしながら，相談者にも回答者にもある理想的な「生き方」が共有して前提にされていないため，回答者はある行為規範と照らし合わせて「～すべきである」と答えることはないし，またそう答えることもできなくなっている。しかしながらそうはいっても，回答者は相談者に自分で決めるように指示するのではなく，相談者にある行為の選択を指示する場合，その理由として規範的価値を語ることになる。

[事例１]

a.「『私生児』の子に将来どう説明？」

「21歳の女性です。一年前に未婚で男の子を産みました。いずれ子どもが大きくなれば自分には父がいないことに気づく時が来ると思うのですが，どう説明すればいいのか，分かりません。［…］『父親は死んだ』と，子どもにうそを教えた方がいいのか，真実を伝えた方がいいのか，迷います。どうすればいいのでしょうか」。

回答（落合恵子）「わたしもあなたのお子さんと同じ生まれです。［…］大方の子は，いま目

の前にいる大人（親や養育者）に心から愛されている実感があれば，事実を受け入れることはできるはずです。父親のこともあるがままに話しても問題はないと思います」。（読売新聞「人生案内」12/24/1999）

b.「精神的安定のために女装がやめられない」

「つき合って三年くらいになる彼女がいますが，もちろん，彼女はそのこと［女装］を知りません。［…］私は，彼女のことを本当に愛しているのですが，女装も精神的な安定のためにやめられません。しかし彼女に言う勇気もありません。どうしたらいいでしょうか」。

回答（蔦森樹）「本心に素直になること」，「本当はやめたくなんかないんでしょう。［…］自分の本心以外のことをしてると歪むよ。彼女と女装どっちを取るか？こういうどっちかを選ばなければ的な考え方は身を壊します。言いたくなかったら言わないでいい。罪悪感もいりません。ただ，言うならその理由が『自分を愛しているからする』であったらいいのになと思っています」。（週刊朝日別冊92頁）

これらの回答にみられるように，今日では回答者が相談者にある行為の選択について答える場合，その理由が明示される。つまり，何らかの行為を選択するにあたってその理由が必要になるのである。「大方の子は，いま目の前にいる大人（親や養育者）に心から愛されている実感があれば，事実を受け入れることはできるはず」（理由）→だから，「父親のこともあるがままに話しても問題はない」（行為の指示）。「自分の本心以外のことをしてると歪む」（理由）→だから彼女に女装の趣味について「言わないでいい」（行為の指示）。あるいは，「自分を愛している」（理由）→だから，彼女に女装の趣味について「言う」（行為の指示）。これらの理由の背後には，「大方の子は，いま目の前にいる大人（親や養育者）に心から愛されている実感があれば，事実を受け入れることはできる」という事実認識，「自分の本心以外のことをしてると歪む」という事実認識がある。それと同時に，子供は心から愛されている実感があることが望ましい，自分の本心に素直になることが望ましい，自分を愛していることが望ましいといった価値が想定されているとも考えられる。このように何らかの事実から価値を導き出すことは，「自然主義的誤謬」を犯しているといえるだろう。しかしながら，日常的な言語活動において，実際にどのようにしてある行為が選択されているか，またどのようにしてその行為の理由があらわれているかについて見れば，事実と価値はそれほど明確に峻別されているとはいえない。事例１－ａの回答においても，「大方の子は，いま目の前にいる大人（親や養育者）に心から愛されている実感があれば，事実を受け入れることはできる」という言明が事実に関することなのか，価値を語っているのか，明確に区別することは難しい。つまり，事実的言明と価値的言明は，形式論理学上で説かれているように明確に峻別されているのではなく，日常的な実践においては複雑に交錯しているといえる。この事例のように，回答者が相談者に何らかの行為の選択について答える場合，それが事実から導かれているからといって「誤謬」とするのは日常的な言語活動からあまりにも乖離することになるだろう。したがって，相談者に何らかの行為の選択について答える回答の中に，その行為の理由として規範的言説を見いだすことができるだろう[16)]。

およそ1970年代までの「人生相談」では見田氏が述べたように，相談者にも回答者にも固定化された「生き方」が前提にされており，それにしたがって回答者は相談者にある行為を選択するように指示していた。それとは異なり，1970年代以降の「人生相談」において前提にされていることは，各々が自らの価値志向をもっているということである。したがって，回答者が何らかの規範を明示すれば，相談者のそれと衝突する可能性が高くなる。そこで，回答者は「衝突の回避」の方法として，何らかの規範をはっきりと明示するのではなく，行為を選択する理由としてのみ規範をほのめかす。しかしながら，ある規範の明示とともに行為が指示されないからといって，個々の行為選択と規範に何の関係もないということではない。仮に自己決定だけが行為選択の基盤になると，結局その選択は自己反省の果てに確証を失ってしまうことになる。なぜなら，人はかつての固定的な「生き方」に拘束されることが少なくなったためにかえって逆に「人生の意味」や「選択の妥当性」を他者に確認してもらう必要が生じてくるからである。つまり，何のよりどころもないままに人生のある地点において何らかの選択を自分自身で決めていかねばならなくなっているにしても他者による決定内容の解釈が重要になってくるのである。また，自己決定にのみ導かれた行為選択だけでは，つねにその選択の妥当性に不安がつきまとい，再び他者によって自らの行為選択の妥当性を支えてもらうことが不可欠になる。相談者は自分の行為選択に不安を感じているからこそ他者に相談し，そうすることで自身の選択の正当性を確認しようとしているのであって，相談者のそうした悩みに対して「自分自身で決めるのが望ましい」とはいっても，それは問題を投げ返しただけでまた同様のプロセスが繰り返されるだけである。つまり，相談者は自己決定だけでは，社会的に妥当するという確信をもって行為を選択することができないのである。誰であれ，何らかの行為を選択するにあたっては，他者に向かって正当化できるような理由を必要としている。その正当化の根拠として規範があるのである。

以上では問いと答えそれぞれを個別的に規範との関係についてみてきたが，「悩み事」を問題として認識するためには規範的な観点が必要とされ，また回答者が相談者に行為を選択する理由として規範的言説があらわれていることがみてとれた。次節では，問いと答えというコミュニケーション的なやりとりの中での規範のあり方について考察したい。

３　「人生相談」におけるコミュニケーションの不一致と規範の関係

（1）コミュニケーションの一致／不一致

先に指摘したように，鶴見和子氏は「質問者と回答者のあいだに，コミュニケイションが成立しているか，あるいはくいちがいがあるか」について考察し，いくつかの実例について「コミュニケイションの成立」ないし「不成立」を調べている。ここでも同様に，問いの区分と答えの区分が一致しているかどうかをみると（表４），いずれの「人生相談」においてもQ0－A0，Q1－A1とほとんどのやりとりは問いと答えがそれぞれの段階で一致している。しかしながら，問いと答えが一致していないものが少なからずある。Q0－A1，Q0－A2などのように相談者が自分の考えの解釈を求めているような相談に対して，回答者は問題点を整理したり，

解決方法を提示しているものや，Q2－A1，Q3－A1のように相談者が解決方法を尋ねていたり，どちらの行為を選択するかについて尋ねているものに対して，問題点の整理をしている回答がある。

こうした相談と回答内容の不一致から鶴見氏のように「コミュニケーションが成立していない」とすることもできるだろう。また，不一致コミュニケーション（dis-communication）が「人間関係のトラブル」や「ストレス」の一つの要因になるとし，「よりよいコミュニケーション」のためにそうした不一致への対処方法を考察するという視点もあるだろう。そこで前提にされているのは「コミュニケーター同士の能力が合致する事によって最高のパフォーマンスが得られるというコミュニケーション観」であり，そうした前提が「よりよいコミュニケーションはどのようなものであるのかを考える際の指針」となるとされる[17]。つまり，「よりよいコミュニケーション」とはコミュニケーションの不一致からコミュニケーションの一致へという過程から導かれるのである。

表4-1　問いと答えの対応関係（読売新聞『人生案内』）　（%）

	A0（解釈）	A1（問題構成）	A2（解決方法）	A3（予測的判断）	A4（技術）
Q0（承　認）	63.4	22.0	14.6	－	－
Q1（見　通　し）	3.0	77.6	19.4	－	－
Q2（方　法）	6.0	25.2	68.2	－	－
Q3（行為選択）	－	33.3	9.5	57.2	－
Q4（手　段）	－	3.4	－	－	96.6

表4-2　問いと答えの対応関係（週刊朝日別冊『現代ニッポンの人生相談』）　（%）

	A0（解釈）	A1（問題構成）	A2（解決方法）	A3（予測的判断）	A4（技術）
Q0（承　認）	80.0	6.7	13.3	－	－
Q1（見　通　し）	8.0	64.0	28.0	－	－
Q2（方　法）	9.0	25.5	65.5	－	－
Q3（行為選択）	25.0	12.5	12.5	50.0	－
Q4（手　段）	－	16.7	－	－	83.3

表4-3　問いと答えの対応関係（朝日新聞『男の人生相談』）　（%）

	A0（解釈）	A1（問題構成）	A2（解決方法）	A3（予測的判断）
Q0（承　認）	16.7	16.7	66.6	－
Q1（見　通　し）	－	62.5	37.5	－
Q2（方　法）	－	25.0	75.0	－
Q3（行為選択）	－	25.0	50.0	25.0

しかしながら，ここではこうした相談と回答の不一致について，それを「コミュニケーションが成立していない」とするのではなく，どのように相談者と回答者のやりとりがくいちがっているのかについて考えることとしたい。コミュニケーションが不一致であるからといって，「コミュニケーションが成立していない」とするのではなく，不一致コミュニケーションをコ

ミュニケーションの一つの形態として捉えることで，人間関係にトラブルを生じさせるといった消極的な側面を見いだすのではなく，相談と回答のやりとりがどのようにくいちがっているのかについて考えることとしたい。相談者と回答者のやりとりがくいちがっているとはいっても，そこには二つの類型があり，問いと答えの段階が一致しているものと比較するといくつかの特徴がみられる。

（２）類型Ⅰ　答えの先取り

どの相談においても，問いの段階よりも答えの段階の方がすすんでいるものがある（Q0－A2，Q0－A1，Q1－A2など）。この組み合わせの相談をみると，以下のようなものがある。

・「悩み事」の解釈（Q0）
　　―問題の整理，方向性の提示（A1）
「『死』が怖くて仕方ない」―「実はだれにもある」（読売新聞「人生案内」回答保崎秀夫11/26/1999）

・「悩み事」の解釈（Q0）
　　―解決方法の提示（A2）
「入院中に従業員が全員やめてしまった」―「家族に心を開いてみては」（週刊朝日別冊94頁，回答岡田義朗）

・問題の整理，解明（Q1）
　　―解決方法の提示（A2）
「上司が私を会社の『ガン』だと言いふらしている」―「疲労とストレスを取り除くこと」（週刊朝日別冊82頁，回答井出孫六）

これらは相談者が自身の悩みの解釈を求めている（Q0）のに対して，回答者が問題点を解明（A1）したり，解決方法を提示（A2）したりと，相談者が「悩み事」を問題として認識する（第一段階）のを通り越して，回答者が問題を構成し，解決方法を考えているものである。本来ならば，Q0やQ1のような解決への見通しが欠けているような相談に対して回答者は問題を整理し，解決への方向付けを示唆するだけで十分である。しかしながら，回答者は相談者に代わって問題を構成し，方向性を与え，解決方法まで提示しており，問いと答えの段階が一致していない。

[事例2]

「借金，気づいたら１千万に」

30歳代後半の主婦です。消費者金融にはまってしまい，気が付けば借金は1千万円に膨らんでしまいました。

夫の給料の半分以上を返済に充て，ボーナスも返済のためになくなってしまいます。何年か前に夫に打ち明けたことがあるのですが，その時は200万円くらいと借金の額を少なめに言ってしまいました。

借金の返済のためにほかの消費者金融から借りるという繰り返しで，もう借りるところもありません。実家からも「お金のことはもう言ってこないで」と言われています。もうだれにも相談できません。

現在，週４日働いていますが，食費にもならない状態です。

子供も大学受験でお金が必要な時なのに，どうして，こんな借金を作ってしまったのか，罪悪感でいっぱいです。

１千万円も何に使ったのか，自分でも分かりません。いったいどうしたらいいのでしょうか。

回答（鍛治千鶴子）

何にお金を使ったのかはっきりしませんが，お手紙にあるように多くの消費者金融から多額の借金を重ね，しかも返すあてもなく生活が切迫している現状から考えると，自己破産の申し立てをするしか途（みち）はないように思われます。

最寄りの弁護士会に早急に相談にゆくべきです。弁護士会には金融のトラブルの相談を専門に扱っているところがありますから，関係書類など持参して具体的にくわしく相談されるようおすすめします。

おそらく自己破産が認められるケースと思われますし，お金の使途が浪費やとばくなどでなければ，現在持っている財産を破産財団に提供するだけでそれ以上追及されないという免責の裁判を得ることも可能ではないかと思います。

弁護士の指示に従いながら解決に向け精いっぱい努力なさって下さい。

そして，そのためには，この際，事実のありのままを夫に打ち明ける勇気も必要ではないでしょうか。（読売新聞「人生案内」8/4/1999）

ここで相談者はなぜ自分がこうした事態に陥ってしまったかがわからず，解決への見通しも立っていない。こうしたQ1のような相談に対応する回答として，回答者はまず相談者の問題を整理し，問題を認識するための解決への見通しを提示していれば，問いと答えの段階が一致しているといえる。しかしながら，回答者は「あなたがそうした状況に陥ったのは，以下のような理由からではないでしょうか」とか，「まずは，なぜそうした状況に陥ったのか考えてみましょう」といった回答をしていない。代わって，「自己破産の申し立て」，「弁護士に相談」といったように解決方法を提示しており（Ａ２），問いと答えの段階が一致していない。こうした回答が答えを先取りしているような問いと答えの段階の不一致は，相談者の抱える問題が「緊急性」のものに多くみられる。つまり，回答者は相談者の状況を緊迫した状況であると認識しているため，答えを先取りして解決方法を示しているのである。

（３）類型Ⅱ　問いの再構成

相談者の問いに対して，答えを先取りして解決方法を提示するものとは逆に，相談者の問いをさかのぼって，回答者が問題を解釈したり，問題を整理したりしているものがある。こうした問いの段階に対して，回答がいわば後退しているような組み合わせには以下のようなものがある。

・解決方法（Q2）―問題の解釈（A0）
「離婚した夫のもとにいる娘のことを知りたい」―「親は存外勝手なもの」（週刊朝日別冊78頁，回答井上都）

・解決方法（Q2）―問題の整理（A1）
「結婚相手どうすれば見つかる」―「したい理由を考えて」（朝日新聞「男の人生相談」回答梶田淳平10/17/1996）

・行為選択（Q3）―問題の解釈（A0）
「名前を変えたい」―「自信が名前の印象も変える」（週刊朝日別冊94頁，回答竹田恵子）

・行為選択（Q3）―問題の整理（A1）
「『結婚』口にされ冷めた愛情」―「人生観すり合わせて」（朝日新聞「男の人生相談」回答中村彰10/31/1996）

・行為選択（Q3）―解決方法の提示（A2）
「妻も少し家事をやってほしい」―「この際放棄しちゃえ」（朝日新聞「男の人生相談」回答香川正行９/12/1996）

これらは相談者の問いに対して，回答者が後戻りして問題を解釈したり再構成しており，問いと答えの段階が一致していない。つまり，相談者が問題を認識し，解決への方向性を獲得し（第一段階），解決方法を尋ねている（第二段階）のに対して，回答者は相談者に問題の解釈をせまったり（「悩み事」以前の段階），問題の整理（第一段階）にまでさかのぼり解決へ向けた段階をいったん後退させ，相談者の「悩み事」を修正したり解消したりしている。

ここで「悩み事」を修正するというのは，相談者の「悩み事」が適切ではないために回答者が問題を再構成することである。たとえば，「女優になるため恋愛必要？」（「人生案内」１/17/1999）と尋ねる相談者に対して，回答者（大森一樹）は「少なくとも，恋は女優になるためのレッスンではないはずです。［…］それよりもあなたにとって大切なことは，女優である前に女であり人間であるということではありませんか。女優という夢とあなたの間にあるのは現実です。そこまで恋という夢でうめてしまったら，現実の自分はどこにいるのでしょう」と答えている。ここで，「女優になるには恋をしていなければダメなのでしょうか」と不安を感じ，「これまで本当の恋をしていない」ことに悩んでいる相談者に対して，回答者は「それよりもあなたにとって大切なことは［…］」と相談者の悩み方を修正している。

また，相談者の「悩み事」を解消するというのは，回答者が相談者の問題認識を訂正することで「悩み事」を解消しているということである。たとえば，「周囲の学友と会話続かない」（「人生案内」９/７/1999）という相談に対して，回答者（三木善彦）は「それほど悩まなければならないことでしょうか」と答えている。ここで「周りの人たちの話題に全く興味が持てず，悩んで」いる相談者は「かろうじて同じクラブの人たちとは，共通の話題があるために話が途切れません。ところが，クラブ外の学生と話をすると，野球やカラオケ，テレビゲームなど，自分には関心のない話題ばかり出てきて，つい押し黙ってしまいます。たまに興味のある話になると，その時だけ生き生きして会話に加わるので，みんなけげんそうな顔をします。『社会不適応者』と思われているようです」と述べている。それに対して，回答者は「それほど悩まなければならないことでしょうか。クラブの人たちとは会話が弾むのですから，基本的な会話能力に問題はありません。興味がないことに，沈黙するのは当然のことです」として，相談者の「悩み事」が問題ではないとして「悩み事」を解消している。

相談者の「悩み事」を修正したり，解消するということは，ある意味で相談者の言明を否定していることになる。なぜなら，回答者は相談者の問題認識が適切でないとして訂正しているからである。しかも，回答者は相談者の求める問いに答えておらず，相談者の「悩み事」を否定し，解消するという相談者と回答者のやりとりに緊張関係がある。

こうした問いを再構成するような答えを提示するというやりとりの特徴は，問題をあえてさかのぼることが妥当と見なされるような回答者の価値的・規範的な言明が明示されるということである。すなわち，回答者は相談者の問いを

ずらすからこそ，規範の強い明示でそのギャップを埋め合わせているのである。

[事例3]

「自信持てずに悩む15歳」

15歳の女子中学生です。自信を持てない自分に悩んでいます。

おとなしい性格で，友達もほとんどいません。勉強もできないし，スポーツも得意ではありません。

学校の同級生たちはみんな明るくて，しっかりしています。

友達付き合いがうまく，あいさつもちゃんとできたり，年下の子に優しくしてあげたりしていて，いいなとうらやましくなります。同じ年齢なのにと考えてしまいます。

私は小学生のころから，学校では，あまり目立った活躍ができない子でした。もう少し自分に自信が持てたら，友達も自然にできてくるのではないかなと思うのです。

この先，なるべく活発な人間になりたいのです。どうすればよいのでしょう。

回答（藤原正彦）

先入観にとらわれているようです。勉強のできる子，スポーツの得意な子，明るく活発な子がよい子などと，だれが決めたのでしょうか。そういう子は，私にとっては退屈な子です。

私はけんかの強い男の子や本ばかり読んでいるネクラな女の子，などの方に魅力を感じてしまいます。

あなたの問題は，「よい子」になれないことではなく，「よい子」になれないと悩むこと，そしてそれにより自信をなくしていることです。

まず「よい子」になることを忘れましょう。それは皆にまかせ，あなたはあなたの個性をみがくのです。何か好きなもの，得意なものを一生懸命にして学年一になりましょう。

読んだ文庫本の数，料理や手芸や武芸の腕，周囲の人にほどこした親切の数，など何でもよいのです。何か一つのことで一番になればしめたものです。自信を失いそうになるたび，そのことや，それに関してもらったほめ言葉を思い出すのです。私もそうしています。（読売新聞「人生案内」4/11/1999）

この事例にみられるように，相談者の問いを問題解決の段階からすれば後退させているようなやりとり（Q2－A1)では，回答者は相談者自身を否定しているのではなく，相談者の問題認識を否定していることが強調される。そして，なぜ回答者は相談者の「悩み事」を解消するのかについて説明している。そこに相談者のもつ価値・規範意識（「明るくて，しっかりして」いるのが望ましい，ないしはそうあるべきだ）を修正するような新たな価値・規範（「勉強のできる子，スポーツの得意な子，明るく活発な子」は「退屈なだけ」で「何か一つのことで一番に」なることが望ましい，ないしそうあるべきだ）が提示されている。ここである規範が問題化されようとしていると考えられる。すなわち，回答者は先行する価値・規範に代わる別の価値・規範を相談者の問いに答えないことによって提示し，また相談者のもつ価値志向や規範意識を否定することによって新たな価値・規範を提示する。そこで，先行する価値・規範の内実の妥当性が問題として浮上するのである。

規範が社会的に問題化されるのは，一つにはこうした過程をとおしてではないだろうか。相談者は反事実としての規範的な観点との対比に

よって問題を構成し，自らの状況を問題として認識する。しかしながら，回答者は相談者の問題認識を修正し，新たな規範を明示することでそれに妥当性を持たせようとする。そこで回答者は相談者の価値志向や規範意識との衝突を回避せず，相談者の問題認識を否定するという緊張関係の中から規範を提示するのである。

各個人が固有の価値志向をもっており，どのような「生き方」を選択すべきかについては各人の決定に委ねられ，一つの具体的な規範的「生き方」は存在しないとはいっても，何かを選択しなければならないような非日常的な場面において，問題を認識するために規範的な観点はもちだされるし，またある行為選択の理由としても規範は語られる。そして，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりの中で，それが「ズレ」ているからこそ，新たな規範が提示され, 問題として意識されようとしている。その先行する規範とは異なる規範の内実についても，唯一「正しい」ものはない。しかしながら，人が自らの人生のある場面でどのような「生き方」を選択するのか，どの行為を選択するのかについて悩み，決定していくとき，規範は一つの指針となってどのような「生き方」を選択するかの支えともなっている。

まとめ

自己責任においてあらゆる選択が可能で何をしてもかまわないとはいっても，何かを選択しなければならないような場面において，人はその選択の妥当性について思い悩むにちがいない。その際，個々の行為選択にとって社会的な規範は全く無関係なのではないということを「人生相談」を事例に考察してきた。ここで個々の行為選択と社会的な規範の関係を「人生相談」を事例にして考察したのは，社会的な規範は相談者が何らかのトラブルに遭遇した非日常的な場面においてとくに問題として意識されるのではないかと考えたからである。また，固定的な「生き方」のモデルが妥当性をもたなくなると，人々のコミュニケーションにおいて問題化され，新たな規範が形成されていくのではないかと考えたからである。さらに，相談者と回答者のコミュニケーションのやりとりが一致しているか，一致していないかという点から，不一致コミュニケーションを「よりよいコミュニケーション」に転換していくという方向ではなく，不一致コミュニケーションも一つのコミュニケーションと見なし，「人間関係のトラブル」を生じさせるといった消極的な面だけでなく，積極的な側面もあるのではないかという点に注目した。

本稿においては以上のような分析の着眼点にしたがって，個々の行為選択と規範の関係，また規範が問題として浮上してくる過程について考察してきたが，以下の点が確認された。

第一に，相談内容から「悩み事」と規範の関係についてみると，ある規範的な観点によって「悩み事」が問題として認識されているといえる。つまり，相談者が問題を認識するためには，ある理想的な状況との対比が不可欠なのである。したがって，問題を認識した相談者はすべて自身にとって望ましいと思われる理想的な状況を暗黙のうちに前提にしている。

第二に，回答者も相談者の問いに答えるためには規範的な観点を必要としているが，およそ1970年代までの「人生相談」が前提にしていたような固定的な「生き方」のモデルが説得力を持たなくなってくると，そうした前提に依拠

しながら答えることが困難になっている。そこで回答者が相談者に何らかの行為選択について答える場合，何らかの規範を明示するのではなく，ほのめかすことになる。つまり，回答者が相談者に何らかの行為を選択する際に，ある規範にしたがって指示するのではなく，行為選択の理由として規範が語られるのである。

第三に，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりにおける規範のあり方をみると，相談者と回答者のコミュニケーションが一致していない場合においてとくに規範が明示されるといえる。すなわち，回答者が相談者の問いの段階に対応して回答せずに，相談者が前提にしている現実解釈を否定するからこそ，新たな規範が提示され，問題化されるようになるのである。

およそ1970年代までの「人生相談」において「信憑性」をもっていた固定した「生き方」のモデルから解放されていると同時にそれを喪失している中で，あらゆる選択が可能であるかのような「なんでもあり」の状況があらわれているように見える。すなわち，個々の決定の「内容」ではなく，自己決定という決定の「形式」が重視される傾向があるように思われる。しかしながら，個々の行為選択と社会的な規範がまったく結合していないのではなく，行為選択の理由として規範は明示されるし，またコミュニケーションの不一致においても新たな価値規範が問題として意識されるようになる。そこでは規範が欠けているのではなく，各々に固有の価値志向をもっていることが前提にコミュニケーションは開始され，たいていの場合それらが衝突することは回避される。しかしながら，ある規範に基づく現実解釈が否定された時こそ，その否定の緊張関係の中から新たな規範が問題化されることがあるのではないだろうか。すなわち，私たちは価値の衝突を回避するようなコミュニケーションが一致している中からではなく，コミュニケーションの「ズレ」という緊張に満ちた関係からこそ規範を社会的に問題化していくのである。

かつての固定的な「生き方」のモデルから解放されている，あるいはそれを喪失している社会において，確信をもってある「生き方」が「正しい」ということは難しい。たとえば，久田邦明氏がいうように「いったいどういう回答なら相談者が幸せになるのか，本当のところは誰にも分からない」。また，「生き方にかかわるような相談ごとに正解があるのかどうかも疑わしい」。そうすると，「身の上相談の一番の回答は“答えないこと”なのかもしれない」[18]。医療や法律に関わる専門家への相談とは異なり，「人生相談」の回答者はそうした「答えられない」ないしは「答えるべきではない」ような「生き方」にかかわる相談に答えなければならないというジレンマを抱えることになる。しかしながら，ある人が自らの規範的な観点から構成した問題によって悩み苦しんでいる時，それに直面した回答者はそうしたジレンマを越えて，相談者の「悩み事」の背景にある規範を否定し，別の規範を提示することがある。

もちろんながら，相談者の「悩み事」を解消するためとはいえ，回答者が提示した規範の内実の妥当性の問題は一回性の「人生相談」のやりとりでは残されたままになる。結局のところ，規範は，ある問いに始まり，その問いを部分的に否定しながら答えることによって問題として意識されるが，その答えの妥当性もまた問われ続ける必要があるだろう。

註

1）Paul Heelas, 'Introduction: Detraditionalization and its Rivals', Paul Heelas, Scott Lash and Paul Morris (eds.) *Detraditionalization:Critical Reflections on Authority and Identity* (Oxford, Blackwell, 1996) p.5.

2）一例として1973年から継続されているNHK放送文化研究所による意識調査をみれば，「理想の家庭像」として，1973年において多数派であった「父親は仕事に力を注ぎ，母親は任された家庭をしっかりと守っている」という「性役割分担型」が大幅に減少し（1973年39%から1998年17％），「父親はなにかと家庭のことにも気をつかい，母親も暖かい家庭づくりに専念している」という「家庭内協力型」が増加している（1973年21％から1998年45％）。NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造［第五版］』（日本放送出版会，2000年）48-53頁。

3）Norbert Bolz, *Die Sinngesellshaft* (Econ Verlag, 1997) S.10-11.（N.ボルツ『意味に飢える社会』村上淳一訳，東京大学出版会，1998年，3-4頁）

4）Max Weber,*Wissenschaft als Beruf,* 1919 (in Gesammelte Aufsäze zur Wissenschaftslehre, 1968) S.612.（M.ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳，岩波書店，71-72頁）

5）Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns* (Suhrkamp Verlag, 1981) S.336-337.（J.ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論〔上〕』河上倫逸，M.フーブリヒト，平井俊彦訳，未来社，1985年，339頁）

6）Robert N. Bellah, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler and Steven M. Tipton, *Habits of the Hearts: Individualism and Commitment in American Life* (University of California Press,1985) p.335.（R.N.ベラー他『心の習慣』島薗進，中村圭志訳，みすず書房，1991年，393頁）

7）Habermas, S.369.（ハーバーマス，藤沢賢一郎，岩倉正博，徳永恂，平野嘉彦，山口節郎訳，前掲書〔中〕1986年，７頁）

8）見田宗介『現代日本の精神構造』（弘文堂，1965年所収，発表年は1963年）２頁。「現代日本社会における『不幸の諸類型』の［…］戦略データとして，マスコミの身上相談にあらわれる事例をえらんだ」。

9）鶴見和子「身上相談の論理」（思想の科学研究会編『芽』1953年９・10号）30-41頁。

10）「身の上相談」ないし「人生相談」には本文中で指摘した見田氏の社会構造と「不幸」の相関関係についての分析や，思想の科学研究会による「問題の発展史」として相談のテーマ別の内容分析（思想の科学研究会編『身上相談』，河出新書，1956年），いくつかのキーワードによって相談内容をコーディングした太郎丸博氏の「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」(光華女子大学『変わる社会・変わる生き方』，ナカニシヤ出版，1999年所収）などがある。また，「身の上相談」を分析するにあたって，相談内容だけでなく回答内容と合わせての分析も重要であると指摘しているものもあるが，ほとんどのものが相談内容にのみ焦点を合わせている。

11）本論では以下の身の上相談を取り扱う。

①『読売新聞』（東京・朝刊）「人生案内」1999年度309件。

回答者（敬称略）：鍛治千鶴子（弁護士），落合恵子（作家），深沢道子（カウンセラー），大森一樹（映画監督），三木善彦（大阪大学教授），保崎秀夫（精神科医），藤原正彦（数学者），里中満智子（漫画家）

②株式会社人生相談社（企画・編集）『週刊朝日別冊：現代ニッポンにおける人生相談』朝日新聞社，1997年。「企業トップ・著名人」および一般公募からの相談と，それに対する回答が掲載されている。本稿では「企業トップ・著名人」の相談ではなく，一般公募からの相談「現代ニッポンの悩み」から77件（複数回答115件）を用いた。

③『朝日新聞』（大阪・夕刊）「人生相談　男もつらいね」18件（複数回答34件）

回答者：仕事や家族のことで悩む男性の相談に「男・悩みのホットライン」などの活動をしている「メンズセンター」のメンバー。詳細は朝日新聞（大阪）の記事（1996年8月15日夕刊）を

参照していただきたい。

＊相談・回答の引用箇所後の（　）内は掲載日，および回答者の氏名である。回答者の敬称はすべて省略させていただいた。なお，引用箇所内の［　］は筆者の補足である。

12）見田宗介3-4頁。

13）読売新聞「人生案内」の投稿規定には「生活上の悩み全般が対象。［…］純粋な法律や健康の相談，就職，結婚その他のあっせんなどは取り上げません」とある。編集について読売新聞に問い合わせたところ，生活情報部徳永文一氏より返答をいただいた。以下，その一部を抜粋すると，まず，相談の選択について「誰の身にも降りかかりえるような，身近な相談を優先させています。純粋な法律や健康の相談，就職，結婚その他の斡旋などは取り上げません。あくまで人生上の悩み，生きていく上での悩みを扱うという趣旨によるものです」という返答をいただいた。新聞紙上に掲載するにあたって「質問内容は，手紙で寄せられることから，分量もまちまちなため，質問のポイントをはずさないようにしつつ，新聞原稿に合うように短く」するとのことであった。また，相談内容をどのようにして複数の回答者に割り振りするかについては，「現在，回答者には精神科医や弁護士，作家，大学教授などにお願いしていますが，専門的なことはその道の専門家にお願いし，家族問題，親子問題，女性としての脳み，若者の悩みなど，それぞれの内容によって，そういう方面に詳しい人，関心のある人にお願いしています。先にも書いたように，あくまで人生の先輩として答えてもらうということで，明確な原則はありません」とのことであった。

14）見田宗介25-34頁。

15）1968年，1978年，1988年，1998年の読売新聞「人生案内」における進路に関する相談，結婚・家庭生活及び仕事に関する相談とそれに対する回答を比較すると，「何を犠牲にしてでも大学へ行くべきである」，「女性の家庭は幸福にある」，「一生懸命働く男性こそりっぱ」といった固定的な「生き方」が妥当とされていたのは，およそ1978年までである。とりわけ1988年の「人生案内」においては，性別役割分業に基づくような「生き方」に代わって，男女ともに「自己決定」が重視されている。拙稿「コミュニケーションとしての身の上相談：身の上相談にあらわれる価値意識の変化」（『立命館産業社会論集』第35巻第1号，1999年）103-123頁。

16）行為選択と規範との結合関係について，メタ倫理学における相対主義的な思考を越えていくつかのアプローチが展開されている。フランケナはいちはやく従来のメタ倫理学に代わって道徳判断を支える理由の研究への転換を促したが，それに応じるかのように1950年代のはじめ頃から様々な試みが展開されている。たとえば，R.M.ヘアは『道徳の言語』，『自由と理性』において，道徳判断が理由によって行為選択を導いたり，行為を規制したりする「指図性」をもつとし，またその理由が「普遍化可能性」をもつことに着目した。また，St.トゥールミンに代表される「理由探求的アプローチ」においては，道徳的判断における理由の位置が重視されている。本稿では，これらのアプローチをふまえて，行為選択の理由として規範があらわれるという見解をとった。参照，W.K.フランケナ『倫理学・改訂版』（培風館，1975年），田中成明『法理学講義』（有斐閣，1994年）第8章「価値相対主義から対話的合理性へ」。

17）立川敬二監修，飯塚久夫，川浦康至，小林宏一，徳永幸生編著『コミュニケーションの構造：人間・社会・技術階層による分析』（NTT出版，1993年），55-65頁。

18）久田邦明「答えないのが正しい答え？：『身の上相談』のジレンマ」（思想の科学研究会編『思想の科学』1990年5月号）28-31頁。

Normative discourse in advice columns: The connection between disagreement and the norm

Tomoka IKEDA＊

Abstract: I consider the normative discourse I today's advice columns, at a time when normative ideas about lifestyle, such as "men ought to go out and earn money, women ought to stay at home to take care of domestic duties", are losing their strength.

First, I look at the advice columns in terms of communication between questioners and respondents and present five stages of questions and responses. Then, I examine whether these stages are in agreement or not. Focusing on the disagreement of question and response, it appears that there are two types of disagreements: "advance answers" and "reconstruction of the problem". Finally, I confirm that it is through these disagreements that validation of normative lifestyles becomes problematic. A situation may be seen as "anything goes", so far as individuals take responsibility only for themselves. However, the choice of action is not unconnected social norms in advice columns. The social norm is narrated through the reason for choosing a particular action, which can be elucidated through disagreement of question and response.

Key words: normative discourse, communication/dis-communication, advice column, trouble, detraditionalization

＊Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University